

言語社会研究科 博士審査要旨

論文提出者 田中 裕介

論文題目 マシュー・アーノルドにおける文化概念の成立

論文審査委員 井上 義夫教授、中井 亜佐子准教授、新田 啓子准教授

1. 本論文の構成

序論 規範と技術

- 1 目的および研究史における位置づけ
- 2 方法および各章の内容

第1章 古典と翻訳

- 1 神聖なる劇場——『文化とアナーキー』から1853年版『詩集』「序文」へ
- 2 図書館の混沌——カーライルの場所
- 3 「眼が痛い」——エンペドクレスの視覚
- 4 「表象」と「印象」
- 5 「規範」としての文字言語
- 6 「翻訳」から「批評」へ

第2章 国家と社会

- 1 流れる
- 2 全体としての社会
- 3 「再改正教育令」とテキスト教育、または学校は家庭であるか
- 4 代表する／代表される
- 5 「国家」の規範化——『文化とアナーキー』
- 6 敗北への回帰
- 7 代議制と君主制をめぐって
- 8 ナポレオン三世礼賛

第3章 文化と批評

- 1 複数の culture——「デモクラシー」
- 2 文学批評の欲望——「主教と哲学者」
- 3 「批評」あるいは「技術」の両義性
- 4 culture、「規範」にして「技術」
- 5 翻訳語としての culture

- 6 culture の偶像崇拜
- 7 「継承」のポリティクス——バーク、アーノルド、ゴルトン

第4章 大衆と観念

- 1 中流階級という「俗物」
- 2 アーノルドの二月革命
- 3 不可能なる「群衆」——カーライル『チャーティズム』と『フランス革命史』
- 4 観念の秩序
- 5 「物質」対「精神」
- 6 「消費」と「娯楽」に抗して
- 7 労働者階級という「愚民」
- 8 不可能なる「大衆」

第5章 国民と民族

- 1 「ネーション」の不在
- 2 イタリア問題と「ナショナリティの原理」
- 3 ふたつのナショナリズム
- 4 混成のイングランド——『ケルト文学研究』 1
- 5 ファミリー・ロマンスとしての批評——『ケルト文学研究』 2
- 6 ヘレニストあるいはヘブライスト
- 7 奴隷制遍在論——カーライルとジャマイカ事件
- 8 イロニーの行方——アーノルドとジャマイカ事件

注

書誌

2. 本論文の概要

本論文は、19世紀イギリスの代表的批評家、詩人、社会思想家であるマシュー・アーノルドにおける culture の意味をアーノルド自身の思考の展開過程に即して分析すると同時に、culture 概念成立時のイギリスにおける歴史的状況を同時代の言説環境との関わりから解明しようとするものである。

第一章「古典と翻訳」は、1853年版『詩集』「序文」、「エトナ山上のエンペドクレス」、「文学における近代的要素」、『ホメロスの翻訳について』を主たる分析対象とし、アーノルドがこれらの批評あるいは詩作品を書く過程で、「規範」に関わる文学者の表現行為を一般的な認識の理想の形式として確立したと論じている。

第二章「国家と社会」では、アーノルドの「国家」概念を検証し、教育報告書『フランスの民衆教育』においては「全体としての社会」を維持するための「技術」として限定されていた「国家」が、『フランスのイートン』（1864）『大陸の学校と大学』（1868）に至る過程で次第に「規範」としての機能を獲得し、『文化とアナーキー』において最終的に個人の内面に根拠をもつ「規範」として規定されたことを論証している。

第三章「文化と批評」では、1860年代前半のアーノルドの散文テキストにおいて潜在的に「規範」としての性格を帯びていた culture が、『文化とアナーキー』ではじめて明確に「規範」として正面に掲げられると同時に「技術」としての機能をも持つにいたった経緯を跡づけ、『文化とアナーキー』が「規範」としての「技術」である culture への信仰を呼びかける一種の偶像崇拜の言説を構成していると論じる。

第四章「大衆と観念」では、アーノルドの同時代社会評論の核心である「俗物」批判について、その成立を「貴族階級」「中流階級」「労働者階級」の位置に対する確固とした歴史的把握に由来するものと捉える。そのあとで、アーノルドの「大衆」(mass) 観の特質を特に彼が多大な影響を受けた先行世代の批評家トマス・カーライルの「群衆」(crowd) との比較を通じて論じ、アーノルドが「大衆」を政治的ネイションを構成する実体として考察する近代的姿勢をもちながらも、政治的実践の領域に直接踏み込むのではなく、「観念」という語を変幻自在に用いることにより、実際の社会の上にそれに優越する「観念の秩序」としてのテキスト空間を仮構したと論じる。

第五章「国民と民族」では、アーノルドの「ネイション」概念を主題とし、『文化とアナーキー』の「結論」および書物化する際に付された「序論」で、それまで彼が必ずしも強調していなかった「ネイション」が急浮上した経緯を跡づける。

「規範」の認識行為を普遍的なモデルとして確立する試みとその文学批評において追究しながらも、慎重にその記述を「技術」の水準に自己抑制していたアーノルドは、1865年後半から1866年にかけて、ジャマイカ事件、フェニアン運動、選挙権拡大運動というイギリス社会の一体性を動揺させる事件が続発する状況下で、culture という概念を前面に掲げて、「規範」の認識行為という「技術」を「社会」に対して「規範」として呈示する試みを開始した。『文化とアナーキー』は新たに culture という基準によって「社会」を再編しその秩序を維持するというアーノルドの意思の産物であると同時に、それを効果的に提示するために過去の自らの著作の引用を繰り返しながら、他者の言説の形式の模倣を重ねて、文学批評の言語と社会批評の言語を混在させた、その歴史の時点におけるアーノルドにしか書くことのできなかつた精緻なテキストであると結論づける。

3. 本論文の成果と問題点

本論文は、culture という概念を軸にアーノルドの詩学と社会批評を一つの体系化した思想としてまとめ上げようとする試みであり、全体としては成功している。1980年代に入って進捗したアーノルドの読み直しは、文化理論家、宗教思想家、文学批評家としてのアーノルドの各々の分野での思想の体系性を論証し、1990年代以降の研究においてはアーノルドの culture 概念の含意するものがさまざまな観点から検討されたが、研究が多様化するなかでアーノルド個人の思想の一貫性と著作の体系性の論証への志向が希薄になる憾みがあった。本論文は、culture 概念の多様性・複数性に関わる研究の成果を採り入れつつ、アーノルドの著作活動の有機的な一貫性を証明しようとするものであり、出版以後の英米の文化風土の醸成に多大な影響を与えた『文化とアナキー』がアーノルドの先行著作とどのような関係を有し、その culture 概念がどのようにして成立し、何を包含しているかを明らかにしている。英語圏の新歴史主義、カルチュラル・スタディーズの問題意識と、日本の伝統的なヴィクトリア朝散文研究のスタイルを融合させるユニークな試みとして評価できる。

論文は構成、論理展開といった点において手堅くまとまっており、アーノルドの用いる言葉一つ一つにこだわって緻密に分析するという、田中裕介氏に特徴的なテキスト読解の方法論もみごとに確立されている。その方法論は概して地道な文献研究であると言えるが、その研究動機には、近年特に多くの研究的関心を惹き付けるカルチュラル・スタディーズの隆盛のもと、ますますその厳密な意味を失してややもすると乱暴に使われがちな「文化」という言葉の思想史的背景を再考しようとする意図が感じられる。この意味で、本論文は1990年代以降の文化理論を相対化しつつ、その歴史的生成に深く関係したにも拘らず現在顧みられることの少なくなったアーノルド思想の再評価を試みた、学術的貢献度の高い論文と言える。

本論文では、アーノルドの culture 概念が、国家＝ステイトのデモクラティックな達成の鍵である道徳的品性と、それを担保する教養を表意するものであることが、丹念に検証されていく。まさにアーノルドのイギリスは、新興中流階級とその搾取にあえぐ労働者階級との対立が鮮明化した時代に入っていたが、彼はこの転換期の中に台頭した俗悪と偏狭、無知と狂暴を懸念し、これを克服する道としての「教養」を説いた。田中裕介氏はこうしたことを、術学的な抽象論に頼ることなく、アーノルドの諸テキストにおけるキーワード art, model, nation 等を丹念に読み解き、翻訳する形で示している。こうした形式的側面も、この論文の手堅さを十分に傍証しているように、文化思想の研究の基礎がこうした文献講読にあることを、本論文は伝えている。

このように高い完成度を示していると評価できるものの、本論文には不備・不足を感じさせるところも存在する。第一に、本論文は日本語で執筆しなければならないという制度上の制約により、分析対象とされる概念の多くに日本語が充てられているため、原語の意味範囲がせばめられたり、逆にニュアンスが付加される結果、論旨が曖昧になる部分が見られる。さなきだに読みづらいたアーノルドの文章の翻訳が必ずしも瑕疵のない翻訳として示されていないこともこの傾向を助長している。第二に、相応の精読を経ぬまま批判されがちなアーノルドを再評価しようという意気込みのあまり、アーノルドの思想の祖述に徹しすぎているとの印象を与える部分が見られ、

ときおり著者自身の議論とアーノルドの区別がつかないことさえある。第三に、国家と緊密に結びついたアーノルドの文化概念が近代的観念に基づいて練り上げられていることが論じられる箇所などでは、「近代性」という概念が著者自身の確信する以上に定義不十分であることを指摘しておかねばならない。殊に論文前半において、思想家における「近代」が古典古代のギリシャをも包摂する場であることが仄めかされるどころなどには、まさにここに暗示される「ギリシャ」なり「西洋」なり「近代」なりが一体アーノルドの思想の中でどのような関係を取っているのかについて、慎重な検証が行われるべきであった。とりわけアーノルドの文化／教養論が「国家」の系論であったことを思う時、註及び書誌にはプラトンと古代ギリシャに関するものが散見されるものの、彼の議論の解釈が古典古代思想への省察を欠いたまま行われたことは、最も大きな問題であると言わざるを得ない。とりわけ「国家」と「技術」の係わりに関する思索を読み解く際に、たとえ明言はされていなくても少なくともアリストテレスの『政治学』程度の著作に戻って、アーノルドの思想内容を読み解くことは必須であったと思われる。本論文が政治哲学に関する論文ではなく、あくまでも文学論であるとしても、すでにして著者自身が「国家」や「公私の峻別」等、西欧政治思想に本質的な領域に切り込んでいる限りにおいて、その分野における思想史的展開を押さえておくのは義務であっただろう。「技術」「国家」「デモクラシー」「感情」「活動」等は、アーノルドのみならず西洋思想において歴史的に形成した鍵概念である。その辺りの解釈がわずかにカーライルとのインターテクスチュアリティのみに留まるのは、本論文の最も弱いところである。

そして究極的にこの弱さは、最終的にアーノルドの作家研究の色彩を強めることになったこの論文が、実際「アーノルドを読み直すことでいま何がしたいのか」という読者の疑問に答えることなしに、いわば自らの研究目的がいかなる学問的課題に応答するのかという点を明らかにしないままに閉じられることと関連する。これは論文全体の構成にも関わることであるが、章から章へ移行する際の動機付けをもう少し補強した上で、最終的にアーノルドを扱うことの意義や必然的な論旨等を、もう少し効果的に演出しておくべきであったろう。

さらに、少なくともこの論文の結論部においては、アーノルドの思想を社会思想史や文化理論の大きな流れのなかで捉えなおすような議論を行うべきであった。例えば、近年アーノルドの人種主義者の側面が強調されているのに対し、著者は彼の人種に対する興味は「ジャマイカ事件」という特定の時事問題に啓発された一時的な関心であるにとどまるものと論じているが、人類学的な Kultur の概念を culture のなかに導入した時点において、彼の議論は必然的に人種主義的にならざるを得なかったのではないか。このあたりは、アーノルドの文化理論の下敷きとなった人類学の著作に直接当たって再検討するべきところであった。

4. 結論

平成 18(2006)年 1 月 15 日、学位申請論文提出者 田中裕介氏の論文および関連分野につき、本学学位規則第 8 条第 1 項に定めるところの最終試験を実施した。

試験においては、提出論文「マシュー・アーノルドにおける文化概念の成立」に関する疑問点および関連分野について質疑を行い、説明を求めたのに対して、田中裕介氏はいずれも適切な説明を以って答えた。

よって審査員一同は、田中裕介氏が学位「博士(学術)」を授与されるに必要な研究業績および学力を有すると認定し、最終試験の合格を判定した。

平成 18 (2006)年 2 月 8 日

最終試験委員 井上義夫 中井亜佐子 新田啓子